



貨幣論上ノ限界效用學說 : 坂西教授ノ批評ニ答フ

左右田, 喜一郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 27(1):1-11

(Issue Date)

1919-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053060>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第二十七卷 第一號

(大正八年
七月一日發行)

論

說

貨幣論上ノ限界效用學說

(坂西教授ノ批評ニ答フ)

東京高等商業學校講師

法學博士 左右田 喜一郎

畏友坂西教授ハ本誌第二十六卷第五號ニ於テ拙著「經濟哲學ノ諸問題」中「貨幣論上ノ限界效用學說」ト題シテ聊カ卑見ヲ縷述シタルニ對シテ(同書第三版第三、二九頁以下參照)懇篤精緻ナル一批評文ヲ惠マレタ。例ニヨツテ論法犀利、多クノ點ニ於テ極メテ意味深キ暗示ヲ與ヘラレタルハ、余ノ先ツ第一ニ深厚ナル謝意ヲ表セザルヲ得ザル所以デアル。

教授ハ余ガ前掲論文ノ結論トシテ「貨幣ニ對スル慾望ハ極マル所アルヲ知ラズ、

即チ無限デアル。ソレカラ貨幣ノ個々ノ一定ノ額ニ對シテハ貨幣本然ノ性質ニ顧ミテ如何ナル意味ニ於テモ限界效用學說ハ行ハル、コトガナイ。即チ本學說ハ貨幣價值論ノ基礎ヲナシ得ルモノデハナイト主張セントスルニ對シテ導キ來リタル前提ヤ又其ノ歸結ニ對シテ左ノ三點カラ異論ヲ稱ヘラレテ居ル。即チ

第一 限界利用遞減ノ法則ハ單ニ一定ノ財ノ順次ニ附ケ加ヘラルル各單位ニ對シテ認メラルル利用ハ遞次ニ減少スルト云フ一般の傾向ヲ示スモノト見ルヲ以テ足リル。必ズシモ其以上ニ余ガ限界效用學說ノ論理的構造ナリトシテ說ク様ニ或財ノ限界利用ガ飽滿點ニ達シ即チ最小否遂ニ零トナリ、之ヨリ更ニ不効用ニ移リ、其ノ不効用ノ最小點ヨリ進ムデ最大點ニ達スルト云フコトヲ考フルニハ及バスコトデアル。當ニ不必要ナバカリデハナイ。限界利用ガ零トナリ更ニ不効用ニ移リタルトキニハ余ノ他ノ機會ニ於ケル主張ニ從ヘバ更ニ經濟上ノ價值が存在セスコトニナルカラ、是取リモ直サズ經濟學上ノ問題トナリ能ハストモ論ジ得ラルルデハナイカ。次ニ

第二 假リニ余ガ所謂限界效用學說ノ論理的構造ナリトシテ其ノ内の必然性トシテ擧グル效用ノ積極の最大、最小ヲ思フコトノ反面ニ、消極ノ最小、最大ヲ思ヒ

得ルヲ舉ゲネバナラスコトヲ承認スルトスレバ、貨幣ニヨツテ充サルベキ第一次、第二次、第三次等ノ慾望ガ全部此ノ法則ノ適用ヲ受クルカラ、從ツテ此等慾望ノ充足手段トシテ用ヒラルル貨幣自身モ亦此ノ法則ノ適用ヲ受クルコトヲ得トイフテ差支ナカラウ。即チ、余ノナスガ如ク他ノ財ト少シデモ異リタル觀方ヲ貨幣ニ許スノハ不當デハナイカ。

第三 如何ナル財モ享樂慾ノ對象タル方面ト所有慾ノ對象タル方面トノ二ガアル。前者ノ場合ニハ財ノ耐久力小ナルカ又ハ其ノ用途ニ限リアルトキハ限界效用ハ急速度ニ遞減シ、之ニ反スルモノハ限界效用ノ遞減緩漫デアル。貨幣ハ此ノ意味ニ於テ總テノ財ノ最終ノ地位ヲ占ムベキモノデアル。又之ニ反シテ財ヲ所有慾ノ對象トシテ見ルトスレバ所有慾ハ凡テ無限デアルカラ、如何ナル財ノ限界利用モ此ノ意味ニ於テハ絶無ニ歸スルコトハアリ得ナイ。而カモ所有ノ高増加スルニ從ツテ其ノ増加單位ヲ尊重スルノ念ハ漸次減少スルカラ限界利用ノ法則ハ依然トシテ存在スルト云ハネバナラス。貨幣ハ此ノ場合所有慾ノ對象トシテ何等例外ヲナスコトアル、モノデハナイ。ト

此ノ外ニ教授ハ同批評文ノ最後ニ貨幣ニ對スル全部利用ト限界利用トノ關係

ハ、他ノ凡テノ財ノ此ノ關係トハ甚ダ趣キヲ異ニシテ居ル所以ヲレキシスト同様ニ主張セラレテ居ルガ、コレハ寧ロ貨幣ニ對シテ限界利用說ノ適用ヲ認容シタル前提ノ上ニ立セラルベキ議論トモ考ヘラレ得ルカラ、此ノ前提ヲ全然認容スル能ハザル余ニトリテハ本文ニ於テハ暫ク之ヲ論外ニ措クモ差支ナイト信ズル。

仍ツテ今余ハ以上三點ヨリノ駁論ニ對シテ、項ヲ追フテ一々答辯ノ義務ヲ果タシテ見タイト思フ。

第一 限界效用學說ニ關シテ余ノ所謂論理的、內的必然性タル積極ノ最大、最小ト同時ニ消極ノ最小、最大ヲ思フコトハ不必要デアツテ、限界利用說トシテハ限界效用ガ唯々遞減シテ行クト云フ一般の傾向ガアルモノト見ルハミデヨイデハナイカト云フ教授ノ駁論ハ、歴史的ニ此ノ學說ガ稱道セラルルニ至ツタ經路ト現今Disutility ナドヲ說ク如キ實際ノ限界效用論者トヲ無視セルモノダトイフ非難ヲ受ケザルベカラザル以外ニ、限界效用學說ヲ此ノ如キ關係カラ全ク切り離シテ其自身トシテ見ルトシテモ既ニ遞減スルトイフ一ノ傾向ヲ認容スルトセバ、其ノ論理上ノ前提トシテ零ヲ思ハザルモ可ナリト云フコトハ考ヘ得ラレザルコトデアル。而シテ既ニ遞減ノ最終點トシテ零ヲ思ハザルヲ得ズトスレバ、進ムデ其ノ傾

向ノ延長トシテ消極的最小、最大ヲ思ハザルヲ得ズトスルモ亦論理ノ當然デア
ト思フ。否、余ハ更ニ進ンデ論ジタイ、積極的效用ノ遞減スル傾向ノ最終點ニ於テ
零ヲ思ヒ得ン爲メニハ、消極的效用ノ最小、最大ヲ思フコトヲ其ノ必然的前提トシ
テ要求セラルト。況ンヤ實際教授ノ議論ニシテモ效用ガ遞減シテ而モ零ニ達ス
ルコトヲ見ルヲ要セズト云フノハ所有慾ノ對象トシテ見ル以外ニハ承認出來ヌ
コトデハナイカ。更ニ教授ノ云フ如キ經濟學ノ認識闕ナドニツキテ未ダ嘗テ一
顧ダニモナシ得ナカツタ從來及現今ノ限界效用論者ガ自然科學的ニ論ジテ享樂
財ヲ取扱フニ其ノ限界效用ノ零ヲ見ズ、消極ヲ見ズト云フ様ナコトハ、余ガ斷ツテ
置イタ通り事實上ハ兎モ角論理上ハ認容出來ナイコトト云ハネバナラス。余ハ
此ノ意義ニ於テ余ノ所謂限界利用說ノ論理的構造ナルモノヲ、其ノ學說ノ內的必
然性トシテ思ハザルヲ得ヌト主張セヌバナラス。

第二 若シ假ニ玆ニ余ノ云フ所ヲ容認セラルベシトシテ、貨幣ニヨリテ充足サ
ルベキ第一次、第二次、第三次等ノ慾望ガ全部此ノ「法則」ノ適用ヲ受クルトセバ、之ニ
ヨツテ從ツテ貨幣モ亦本法則ノ適用ヲ受ケザルヲ得ヌト稱セラルルニ對シテハ
余ハ先ヅ第一ニ余ガ如何ナル意味ニ於テ貨幣慾ハ無限ナリト主張スルカヲ諒解

セラルレバ、從ツテ此ノ駁論ニ對シテ一個ノ解答ヲ提供スル所以デアルト思フカラ、茲ニハ既ニ拙著ニ於テ述べタ言句デハアルガ、之ヲ更ニ繰返シテ説明シテ見タイト思フ。即チ

⑥抑々貨幣慾ヲ以テ無限ナリト云フ場合ニ於テ所謂無限トハ何ヲ意味スルカト云ヘバ、吾々が現今ノ實際經濟狀態ニ於テ貨幣ニヨツテ満足セラルル慾望ノ數ヲ一々吾々ノ意識ニ上ボスコトハ、是正ニ人ノ能力ヲ超エタルモノナルガ故ニ此ノ意味ニ於テ殆ンド無限デアルトイフノデアアル(拙著第三九〇頁)サレバ貨幣ヲ以テ無限ノ目的ノ結合點ヲナス手段ナリトイフ場合ニ於テモ所謂無限トハ唯々此意味ニ於テ曰ハルベキデアアル。即チ教授ノ云フガ如ク貨幣ニヨツテ充足セラルル第一次、第二次、第三次等ノ慾望ノ數ヲ盡ク吾等ノ意識ニ上ボストイフコトハ殆ンド不可能デアアルガ故ニ其ノ無數ノ慾望全部ニ對シテ悉ク限界利用說ノ適用ヲ思ヒ、更ニ進ムデ此ノ意味ニ於テ貨幣ニモ亦限界利用說ヲ適用セシメ得ト云フコトハ、假令論理上可能デアルトシテモ、余ハ此ノ如キ事實上而シテ或意味ニ於テ又從ツテ論理上ノ不可能ヲ含マシメタル意義ニ於テ貨幣慾ハ無限ナリト云フニ過ギナイノデアアル。此ノ意味ニ於テモシ貨幣慾ヲ論理上有限ナリト主張シテモ又

余ノ如ク或約束ノ下ニ貨幣慾ハ無限ナリト云フテモ其ノ結果ニ於テ些ノ異ナル所アルヲ見出シ得ナイ。教授ノ云フ如ク貨幣ニヨツテ充足セラルベキ第一次以下無數ノ慾望ヲ論理上學ゲ盡クシ得トセバ貨幣ニ限界効用學說ガ適用セラルルヤ否ヤハ全ク無用ノ論トナリ終ルデアラウ。何トナレバ此ノ如キ場合ニ於テ或ル意味ニ於テ無限ト稱スルヲ解シテ有限ナリト云フハ言葉ノ爭ニ過ギナクナルト同様ニ、又此ノ場合ニ限界効用學說ノ適用ガ可能ナリトイフモ、不可能ナリト云フモ畢竟亦同ジク言葉ノ爭ニ終ラネバナラヌカラデアアル。唯茲ニ注意スベキハ無限ニ慾求セラル、モノ必ズシモ唯々其ノミヲ以テ限界効用學說ノ適用ヲ受クルモノニ非ズトハ云ヒ得ナイカラ、余ハ別ニ貨幣慾ハ無限ニシテ而カモ本學說ノ適用ヲ受クルモノデナイト云フ論據ヲ見出サントシタノデアアル。教授ノ駁論ノ第二點ハ畢竟此ノ特定ノ意味ニ於テ貨幣慾ハ無限ト稱セラルベキデアツテ之ニヨツテ充足セラルル直接慾望ノ凡テニ互ツテ限界効用學說ノ適用セラル、コトヲ思フハ貨幣本然ノ性質上事實上ハ勿論又或意味ニ於テ論理上不可能デアルト云フコトヲ看過シタモノニ過ギナイ。

第三 享樂財ニ對スル慾望ハ無限デハナイガ、所有慾ノ對象トナルトキハ其ノ

慾望ハ凡テ無限デアルト云フ教授ノ論ニ對シテハ、余ハ拙著ニ於テ既ニ縷々其ノ如何ナル意味ニ於テ此ノ論ノ誤マレルモノナルヤハ指摘シテ置イタ。所有慾ノ對象ヲ其自身トシテ考フレバ、之ニ對スル慾望ハ常ニ有限デアツテ決シテ無限デハアリ得ナイト云フコトハブレインタノガ權力慾ノ對象トシテ奴隸、家畜等ヲ舉ゲテ、此等ニ對スル慾望モ亦無限ナリト云フ論ノ誤マリデアルコトヲ舉示シテ置イタカラ茲ニ再舒スルノ必要ハナイト思フ(拙著第三八一頁以下)。即チ所有慾ノ對象デアツテモ其ノ物トシテ手段トシテデナク目的トシテ欲求セラルルトキハ教授ノ説ニ反シテ余ハ限界效用學說ハ常ニ適用サルベキデアルト主張シタイ。又此ノ如クンバ拙著ニ述ベタ様ニ時ト場合トニヨツテハ之ト反對ニ效用遞増又ハ激増ノコトモアリ得ト考ヘタイ。畢竟所有慾ノ對象トシテ考ヘラルル場合ト雖モ、享樂慾ノ對象トシテ考ヘラル、場合ト同ジ様ニ、其ノ對象ガ對象自身ニ於テ、或目的トシテ考ヘラルル場合ニ於テハ、所有慾ノ對象タルト享樂慾ノ對象タルトニヨツテ區別サルベキ謂ハレハナイ。貨幣ガ所有慾ノ對象トシテ、特ニ其ノ之レニ對スル慾望ガ無限ナリト云フハ、他ノ所有慾ノ對象ニ於ケル様ニ對象自身トシテ其自身ニ於テ最終ノ目的タリ得ナイカラデアアル。即チ貨幣ハ手段デアツテ最

終ニ於テ目的其自身タルコトハ論理上考ヘラレ得ヌカラデアル。此ノ場合ニ於テ近世經濟組織ノ實際ニ顧ミテマルクスノ G-W-G ノ方式ニ見ル如キ心理的事實ヲ余ハ決シテ無視シハセヌ、又實際問題ノ解釋ニ當ツテ貨幣ガ目的自身トシテ取扱ハル、トイフ事實ヲ無視スルコトヲ許サヌハ云フマデモナイコトデアルガ貨幣價值論ノ根本問題トシテ其ノ本然性質ヲ究明スルニ際シテ、貨幣ヲ何等カノ意味ニ於ケル最終ノ目的トシテ論ジ、手段トシテ之ヲ見ルヲ忘ル、ハ確カニ論理上ノ錯誤デアルト云ハネバナラヌ。之ニ反シテ貨幣以外ノ他ノ如何ナル所有慾ノ對象タルモノト雖モ、對象自身トシテ考ヘラレテ最終ノ目的タリ得スト云フモノハ是亦考ヘラレ得ザルコトデアル。貨幣ハ此ノ點ニ於テ全ク他ノ如何ナル所有慾ノ對象トモ區別セラルベキ特異ノ點ヲ有スル。所謂限界利用說ナルモノハ其ノ根本ニ於テ對象自身トシテ其自ラ最終ノ目的トシテ考ヘラルル場合ニ於テノミ凡テ其ノ適用ヲ受クベキデアル。(限界利用說其自身ガ此ノ場合ニ如何ナル修正ヲ施サルベキヤ即チ同說ノ學理上ノ妥當性如何ノ問題ハ自ラ別論ニ屬スル)反之如何ナル意味ニ於テモ本然ノ性質ニ顧ミテ目的トシテ考ヘラレ得ラレザルベキ貨幣ハ、其ノ本然ノ性質ヲ論ゼラルル場合ニ於テ限界效用學說ヲ適用セシメ

ントスルコトハ論理上ノ矛盾デアル。貨幣ノ價值ヲ意味スルモノトシテ貨幣價值ナル成句ハ此ノ故ニ、余ニトツテハ一個ノ Contradiction in adjective デアル。何トナレバ貨幣ニハ價值ハナイカラデアル。故ニ限界利用說ヲ云々シテ其ノ價值ヲ論ゼラレ得ベキ前提タルモノハ其ノ適用ヲ受クベキ對象ガ目的自身トシテ考ヘラレ得ベキトキノミニ限ルト云フベキデアル。貨幣價值ト限界利用說トノ關係ノ中心問題ハ其故ニ、言葉ヲ換フレバ貨幣ハ如何ナル意味ニ於テカ論理上最終ノ目的自身トシテ考ヘラル、コトヲ得ベキヤ否ヤト云フコトニ關スル。即チ貨幣論上ノ限界效用學說ヲ認容スルヤ又ハ拒否スルヤハ一ニ懸ツテ貨幣ヲ以テ一ノ最終目的トシテ取扱フコトヲ得ベシトスルヤ又ハ如何ナル意味ニ於テモ手段以外ニ目的トシテノ解釋ヲ許スコトヲ得ズトスルヤニ關スルノデアル。此ノ場合ニ於テ特ニ注意ヲ要スルコトハ心理上ノ實際事實ト論理上ノ意味トヲ混淆スルコトヲ許サズト云フコトデアル。——此ノ如クシテ畢竟本問題ハ之ニヨツテ貨幣本然ノ性質ヲ如何ニ觀ルカノ根本問題ニ觸ル、コトヲ示ス所以デアル。而シテ余ガ貨幣價值論ノ成立ニ於テ限界利用說ヲ認容スル能ハズトスルハ換言スレバ余ガ如何ニ貨幣本然ノ性質ヲ解スルカニ明答ヲ與フルモノデアル。反之貨幣ニ

對シテ限界效用學說ノ適用ヲ稱ヘントスルモノハ、余ト全ク反對ノ立場ニ在ツテ、貨幣本然ノ性質ヲ理解セント欲スルコトヲ示スモノデアル。此ノ意味ニ於テ貨幣論上ノ限界效用學說ハ、實ニ貨幣論上ノ一學說ヲ取扱フモノニ止マルモノデハナイ。貨幣論ノ最モ奥ニ潜メル根本問題ヲ表面ニ現出セシメテ之ヲ如何ニ決定スベキヤニ對スル態度ヲ定ムル所以デアル。

以上述ブル所ニヨツテ余ハ教授ノ極メテ暗示多キ所論ニヨツテ益々本問題ガ貨幣論上ニ於テ一大難問ヲ形成スル所以ヲ更ニ明ニスルノ機會ヲ得タト同時ニ、余ガ拙著第三版序文中ニ述ベタ如ク、此ノ如キ根本問題ヲ取扱ハントシタル余ノ本論ガ我學界ニ於ケル幾多ノ貨幣論專攻ノ學士ヨリ今迄何等ノ批評モ又論難ヲモ得ル能ハズシテ默殺サレツ、アリシコトヲ自ラ深く恥ヅルノ情ニ堪ヘザルモノデアル。今幸ニシテ教授ノ批評ヲ得テ聊カ自ラ慰ムルコトヲ得タル喜ビヲ公ニシテ茲ニ教授ノ厚意ニ酬ヒタイト思フ。本文愈ツテ更ニ教授ノ示教ヲ受クルヲ得バ恐クハ當ニ余一人ノ幸ノミニハ止マルマイ。(八、六、二)